

情報センターと図書館の融合の行方 —技術の融合からシーズの創造へ—

武蔵大学 小野成志

概要：2回にわたり開催されたCAUAシンポジウム「情報センターと図書館の融合の行方」を総括し、技術的な要請や経営効率上の要請に基づく情報センターと図書館の融合はもはや時代遅れであり、大学として新たなシーズの創造のための融合を目指さなければならないことを明らかにした。

キーワード：図書館と情報センター、情報基盤、イノベーション

1. はじめに

CAUAシンポジウム「情報センターと図書館の融合の行方」は、CAUAとしては異例なことであるが、2006年10月20日¹⁾と2007年6月1日²⁾の2回にわたり開催され、私は、その二度のパネルディスカッションの司会をさせていただくという貴重な経験をさせていただいた。幸いに多くの方の参加を得て、そこから得られた収穫は決して小さくはなかったと思っている。

このシンポジウムで得られた成果を一言でまとめると、「情報センターと図書館の融合」は、従来図書館と情報センターの融合に前提と考えられていた技術の融合という視点から新たなシーズを生み出す組織として、後にご紹介する「大学のイノベーション」の基盤としての機能を有するという方向に動き出さなければならないということが明らかにされたことではないかと考えている。

以下ではシンポジウムでの議論を紹介しつつ、「大学のイノベーション」の基盤としての情報センターと図書館の融合の行方を探ってみることにしたい。

2. 図書館と情報システムセンター

第1回目のシンポジウムは、千葉大学付属図書館長土屋俊氏の基調講演で幕を開けた³⁾。基調講演では、情報センターと図書館の歴史的な経緯を振り返り、かつてさかんに模索された「図書館と情報センターの融合」の時代と現在の両組織の組織ゴールは大きく異なっており、単純な融合は失敗に陥る可能性が指摘された。

すなわち、情報センターは、かつてのように多くの研究者に不可欠の情報基盤を与える栄光の場所ではもはや無くなっており、図書館もまた、かつてのように研究者に不可欠の場ではなくなっている。インターネットの成功と少子化等に伴う大学自身の役割の変化

が、両組織に大きな変革を迫っているという指摘である。

これを受けてパネルディスカッションは「情報センターと図書館の連携・融合はシナジーを生むか!」と題されて開催された。

慶應義塾大学国際センター加藤好郎氏からは、慶應義塾大学の図書館が情報センターと融合し、やがて別れていった経緯が紹介された⁴⁾。この報告は、基調講演で指摘した図書館と情報センターという2つの組織の役割の歴史的な変化を象徴したものとなった。

図書館は1990年代以降今日に至るまで、いわゆる情報化の波にさらされている。書籍などの紙媒体だけのアーカイブという機能は今では図書館の機能の一部でしかない。かつては、DVDなどのメディアの扱いに苦心し、今日では、電子ジャーナルや検索エンジンなどの登場で、利用者減に悩んでいると言うのが図書館の実態である。

一方、情報センターについては、基調講演で指摘されていたように、初期の時代には、学内の計算センターとしてコンピュータを有している唯一の組織として存在し、次の時代においては、インターネットの唯一の管理者として学内に君臨していた時代があったのであるが、今日では、パーソナルコンピュータとインターネットの普及によってその地位を失ってしまっており、セキュリティという名の下での、情報センターから見れば不心得なユーザのお守りに追われているという実情がある。

二つの組織が直面しているこうした厳しい状況の中での図書館と情報センターの融合について、佐賀大学総合情報基盤センター長只木進一氏は、「共通の情報基盤」と「異なった技術の融合」という観点からご自身の体験を紹介されており、このような組織の融合は一貫したポリシーの元で初めて実行をあげるという点を指摘されている⁵⁾。また、情報センターが有する情報基盤は、ある種の絶大な権力を有しており、法人運営の要となりうる

ことをさりげなく指摘されていることも注目に値する。

学習院大学村上登志男氏は、組織的な融合経験は持たないが、情報センターと図書館の間の協力関係について歴史的な経緯を交えて紹介された⁶⁾。この場合においても、組織的な融合をした場合と同様の問題が指摘されていた。図書館の電子化に対する取り組みに対する情報センターの協力やネットワーク、サーバなどの基盤整備に関する技術的協力関係は、どちらの組織にとっても重要と認識されながら、実現までに長い時間をかけなければならない実情がある。これは只木氏が、図書館のような「文系の組織」と情報センターのような「理系の組織」の文化の相違がコミュニケーションを難しくしているという指摘と重なるものがある。

こうした中で、札幌医科大学付属総合情報センターの今野穂氏は、2007年に図書館と情報センターを統合した成果について紹介された⁷⁾。地域医療従事者への米国国立医学図書館の検索システムPubMedなどを日本で最初に開放するなどの取り組み事例は、もともと図書館組織として高い意欲を持っていたところに、情報センターの技術がインパクトを与えるという好ましい成果のケースとして注目すべきものがあった。

只木氏の場合も今野氏の場合も、図書館と情報センターの融合は、今日しばしば見られる経営効率の向上といった財務的な事情という視点では成功し得ず、融合のための明確な目的とロードマップが必要という点で共通した認識を有している。

このシンポジウムの最後に東京大学基盤センターの安東孝二氏から、情報センターとの融合は、今や図書館とだけではなく、たとえば保健センターなどあらゆる組織からの要請があり得るとの指摘をいただいた。この指摘こそ情報基盤を提供する情報センターと情報をサービスとして提供する図書館のあり方の相違を明確に示している。

3. 新しい融合とその課題

第2回目のシンポジウムは、「組織統合・サービス統合の先にあるもの」と題されていたが²⁾、その内容は、図書館と情報システムの融合のもたらすシーズという観点によってまとめることができるかもしれない。

慶応大学デジタルメディア・コンテンツ総合研究機構福原美三氏の基調講演は、まさに

そうした新しい組織の出現を要請している⁸⁾。MIT オープンコンソーシアム (OCW) が提供する新しい講義スタイルは、従来の情報センターの有する情報基盤技術、図書館の有する情報サービス技術の他コンテンツ開発技術などを融合してはじめて効果をあげることができる非常に新しい形態のサービスである。

しかし、パネルディスカッションでは、そうしたシーズに向けての融合のための難しさという点も指摘された。

第1回目からパネルに参加いただいている加藤好郎氏は、リエンジニアリングという切り口で経営的観点と要員養成のために新しい組織に必要な要件を提示されている⁹⁾。従来の図書館のあり方だけでは済まず、経営的観点から求められるマーケティングなどの観点の重要性を訴えられた。その中心的な視点は人材の養成にある。この点は、鶴見大学図書館長谷川豊祐氏も同様の指摘を行っている¹⁰⁾。また、鶴見大学図書館では地域連携を始め様々な試みが行われており、それに対応したノウハウを開発しているが、その意味で融合すべき組織や技術は、図書館と情報センターにとどまらないという点を指摘されている。湘南工科大学附属図書館長坂下善彦氏も、やはり人的な養成を課題としてあげられる¹¹⁾。組織的な融合というよりは、個々の人的スキルの中での技術的な融合が重要であるという観点は、今回のパネラーの共通した認識である。

只木氏進一氏も第1回からパネルに参加していただいたが、今回のパネルでの指摘は、以上のパネラーから指摘のあった人的養成という問題に加えて、融合に際しては、「統合すべき問題」と「統合せずに独立に行うべき問題」の峻別が必要であるという重要な観点を提供している¹²⁾。セキュリティに関わるような問題、経営効率に関わるような問題は共通の基盤で展開しなければならないし、教育研究や事務機能として自立的に解決すべき問題とは区別しなければならないとの指摘である。

こうして、シーズを生み出すための基盤は、結局は、組織として人材をどう育てるかに係わるが、同時に経営的な観点、組織全体と総合的に見渡してバランス良く組織運営をする観点が必要であるというのが今回のパネルの総括であったと言える。

4. 「大学のイノベーション」に向けて

これからの大学は生き残りをかけた戦略的な厳しい競争にさらされると考えられているが、この状況は必ずしも後ろ向きの内容だけを持っているわけではなく、大学自身が新たなアイデアを創造し社会的に意義のある価値創造を行い、独自に研究教育を展開する機会の提供を意味する部分があるように思われる。仮にここではそれを「大学のイノベーション」とよばせていただくことにする。

さて、大学として期待されているこのような「大学のイノベーション」を支えるものは、様々なものがあり得るであろうが、少なくともその一つは情報基盤とその上にたつ様々な情報資源を統括的に効率よく提供できる仕組みであるはずである。これこそが新しい「図書館と情報センターの融合」の姿ではないだろうか。また、只木氏が指摘するようにそれは経営戦略上の武器にもなりうるという観点からも図書館と情報センターの融合は見直されるべきであろう。

こうした新しい融合を目指すための様々の試みは、パネラーの方々の紹介された事例の中から読み取ることができる。経営的観点からのCIOなどによる統括的な運用、OCWやPubMedなどの新しいコンテンツに対する取り組み、共通認証基盤の整備など、それぞれの取り組みは、小さいように見えるが、これからの新しい図書館と情報センターの融合の行方を示唆していると言えるだろう。

参考文献：

- 1) CAUA フォーラム 2006
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/index_report.htm
- 2) CAUA フォーラム 2007
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/index_report.htm
- 3) 土屋俊「情報センターと図書館融合の行方：来し方を振り返り先々を展望する」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/2006_goudoukikaku/pdf/tsuchiya.pdf
- 4) 加藤好郎「情報センターと図書館の融合はシナジーを生むか」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/2006_goudoukikaku/pdf/kato.pdf
- 5) 只木進一「情報系センターと付属図書館連携と情報基盤の共通化」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/2006_goudoukikaku/pdf/tadaki.pdf

- 6) 今野穂「図書館員から見た組織統合の系譜と課題」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/2006_goudoukikaku/pdf/konno.pdf
- 7) 村上登志男「図書館と計算センターの連携」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/2006_goudoukikaku/pdf/konno.pdf
- 8) 高等教育オープンコンテンツの潮流～組織融合・コンテンツ融合の発展～
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/pdf/forum2007_fukuhara1.pdf, http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/pdf/forum2007_fukuhara2.pdf
- 9) 加藤好郎「組織統合経営サービスの先にあるもの：経営管理の視点から」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/pdf/forum2007_kato.pdf
- 10) 長谷川豊祐「高等教育サービスと図書館の融合」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/pdf/forum2007_hasegawa.pdf
- 11) 坂下善彦「図書館業務そして図書閲覧手段の情報処理システム」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/pdf/forum2007_sakashita.pdf
- 12) 只木進一「情報センターと図書統合の行方 情報統合と活用」
http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2007/pdf/forum2007_tadaki.pdf